

私は当時おじいさんから、四月一日に米軍が上陸する前に、三月二十七、八日頃、米軍の斥候が北谷にきていたことを聞いています。南部にさがったそうです。

当時の私のところの家族構成はですね、おじいさんと、両親に妹と弟でした。その五名は、米軍の斥候を捕虜にしているのを見てから、南部にさがったそうです。

桃原のヤジバンタ、今のアメリカ将校クラブ近くには、友軍の賀谷十二大隊の一コ分隊がいて、その兵隊たちが、米軍の斥候一人を後手にくびって、うちのおじいさんたちが隠れていた壕の近くまで、つれてきたそうです。すると、比屋根さんというおじいさんが、棒を持ってきて、「チュバチエ、クワッサ、クワッサ」して、撲りたがっていたそうです。その後うちの家族は島尻の外間(東風平村)に行ったそうですが、米軍の斥候の話はあとで聞きました。

私は防衛隊になって、北玉小学校に駐屯している船舶工兵隊に所属していました。

私は三月二十四、五日に防衛隊はすぐ部隊に集るようという命令でですね、砂辺の今の嘉手納飛行場の一部になっている所でですね、シード(宇勢頭)まで行ったんです。そして翌日の午前十時頃から空襲がはじまって、午後一時頃からはものすごい空襲があつてですね、北谷ガアラ(川)の上になつているシガイから回つて下りて行つて、部隊の壕に帰りました。それから後日、艦砲射撃がはじ

まったんです。

田港という家があつたんですがね、私はちようどその家の前に休んで坐っていました。そこにいる子供たちが海の方からピカピカ灯りが見えるよというもんだから、見たらですね、艦砲射撃だもんだから、君たちは早く逃げないと大変だよ、と私は言つたんです。それから砲弾がどんどんくるもんだから、その家に夕方まで隠れてから、部隊に帰つたんです。空襲が先にあつて、三日ぐらいしてから艦砲があつたように記憶しています。

そこで、壕の前に坐っている兵隊たちに、あれは艦砲射撃だよと私が言つたら、誰だそんなことをいう奴は、お前は人心を動揺させるようなことをいうが、お前は見たのか、と私は上官にひどくおこられましたよ。

だけど、私が艦砲射撃だと言つてから、すぐに、みんなは艦砲を感じはじめ、壕の入口にいたものもみんな、奥の方へ逃げている。

それから間もなく、三月二十五日頃、私たちは部隊として五百名ぐらい宜野湾・北谷・越来・読谷・美里等の出身の防衛隊全部が、南部の東風平村の宜次に移動しました。

宜次には二十日間ぐらいいて、塹壕を掘つたり、また糧秣運びなどをしました。糧秣運びはですね、トラックに塹壕(偽装の意)を作つて、防衛隊五名に運転手と助手と全部で七名が乗りこんで、南風原村の先の識名の近くまで、夕方から夜にかけて米俵を持って行くことでした。二十日間のうちに七回ぐらい通いました。むこうでは女の人たちが鉄兜を被つて、糧秣を受取りにきていたので、それ

を見て私は、いよいよ戦場が近付いてきたなと思ひましたね。

二十日経つと、防衛隊の半分は、そこから富盛・八重州の小松隊とついで自動車部隊の輜重隊として、配属されました。私も一緒にでしたが、しばらくすると私は工兵隊にやられました。輜重隊のときは食事はよかつたんですけど、工兵隊になつてからは、一日に八勺の米しか配給がなかったから、体力が衰えて、もう米俵を担ぐことができなくなつていましたね。富盛から与座の工兵隊に転属されてからですね、私たちは擲弾筒直射砲の教育を三日受けました。

そして首里に行きました。第一線にやられたわけです。私たちは首里の崎山のカジマヤーにある壕に三日間入っていました。一回だけ、私は擲弾筒をもって運玉森まで行つたんですが、一べんも撃てなくて、撃つたら最後ですから、生きのびて帰ってきました。私は双眼鏡で見ましたけど、敵は五百メートル近くまできていて、絶対に動かせませんでしたね。もし敵が側まで近寄ってきたら、仕方がないから、私はニッコウ箱(急造爆雷)を投げるほかはないと思つていましたよ。

それから私は、繁多川に行つて、昼は壕掘り夜は弾薬運びをして、首里が包囲されるまでいました。またそこでは、第二線陣地から運玉森に、負傷兵を四人で担架を持ってかつぎに行つたんですが、大変だったですね。弾がとんでくると、担がれている人の方が先にとび跳ねて逃げたりして、私はとんできた石にあたりたりして。もうこれでは、命がいくつあつても足りないと思つて、私は逃げてきたんです。

そして私は外間に行つてですね、両親を探して歩いて、ちようどまた逢うことができたんです。バックナー中将が戦死したところの、国吉・真榮里に私の両親はいたんです。

もう五月下旬か六月上旬でしたから、その辺も危険で、私たちはそこに一週間ぐらいいました。そこでは、国吉の向かいに田原屋取りという所があつて、その民家に三日いてから、壕を掘つて、壕の中に隠れていました。それから一週間後は、毎日地形が變つていきました。艦砲射撃で、田原屋取りの近くの壕から、あとで真壁の同字(ドウモツ)に行きました。珍しいことには、ちよつと石をどけて漁ると、落盤した後のように自然壕があつたんですね。その穴の中に私たち家族が入つていたんです。けれども、そこも砲弾が激しくなつて、逃げるときに、家族はちりちりばらばらになつてしまいました。敵はすぐ眼の前に来ていました。私は自然壕に一人で二、三日入っていました。そこからは一番後になつて逃げ出たので、家族がどこへ行ったのやら判りませんでした。私はその山を登つて、福地まで行つて、ウルドマ・タカマブニと逃げたんです。マブニ岳からギーザバンタに行きました。あそこに行つてから、昼間、私は捕虜になつたんです。

ギーザバンタに行くまでに、あちこちうろついて、入ろうと思つてもなかなか壕はないし、壕があつても死人が多くて、くさくつて入れないし、アメリカのトンボぐわが上空で廻ると逃げなけりやいけない、と騒騒からず感じていましたから。また三時頃マブニの海岸のウルドマにきてみたら、沖には敵の駆逐艦等が五隻ぐらいおるんですよ。そしてときたまヒュウヒュウ弾がくるんですよ、

は、これはもう大変だと思って、ギーザバンタに行ったら、駆逐艦からマイクで呼びかけていましたよ。何もしないから出てきなさい、軍人は裸になって出てこい、というわけです。

私はどうしたらいいのかと迷ってしまいました。そこで私は軍靴（編上靴）をぬいで、しばらく素足で歩いてから、死人の地下足袋を取って履いて、軍服も脱ぎ捨てて死人の着物と替替えましたよ。ギーザバンタには、何百人という避難民がいました。友軍もいるし、ジュリアンマーもいるし、ペルーやブラジル帰りもいるし、それだけの雑多な人たちが、もうどうにもならないというわけで、みんな誘い合って、さあさあ、と出て行って見たわけです。私は手榴弾と鉄兜と飯盒の入った風呂敷包みだけは持っていました。その風呂敷包みは、最初は衣類だけ入ったもので、道で捨てたものでした。

そして私たちは、五十名ぐらい一塊りになって出て行ったんです。出てから廻れ右してみたら、すぐ私の目の前にアメリカがいたんです。昼は出てみたことがほとんどないもんだから、方向がわからず、私がいつの間にか先頭に立っていたんですよ。さ、お前は逃げるなよ、逃げたら殺されるよ、と側にいる人が私に言っていました。その人は、八十過ぎのおばあさんを背負っていて、私に勇気付けるように、落着いて上って行けよ、みんな後からついて行くから、と言うので、私はただ歩いて行き、みんなもぞろぞろついてきました。

捕虜になったとき、私は二十八歳で一番若かったもんだから、それだけの人数から私一人だけ呼び出されて、荷物も取り上げられ、また私はガンケムンだったので、仕事にも出掛けないで、びっこの真似していました。それというのも、いつ日本軍が反撃に出るかもしれないと思って、いざとなったときのことを考え、そのときは金網を破って逃げるつもりでした。ところが、毎日びっこの真似していたら、ほんとに自分でもびっこのような気がしてきて、また実際によく歩けなくなっていましたね。

それからずっと後になって、びっこの真似をしないでずむようになつてから、お前は どうして作業に出ないのかと、班長に問い詰められ、私はマラリヤにかかっているんだと答えましたが、医者に診べられて、どうもないということになって、トラックで真玉橋近くに作業に出されました。仕事は、奥武山公園の米軍キャンプで一日中アメリカの靴磨きでした。ばかばかしいので、そこでも私は一週間ぐらいいしか仕事はしませんでした。頭が痛いとか気分が悪いとか言いわけして。

屋比久の収容所からは、馬天港から船にのせられ大川（旧久志村）にやらされました。大川で、捕虜になってきた家族と一緒にりました。そこは食糧がほとんどなく、またマラリヤが発生して、大変でした。半年してから、私たちは古知屋に逃げて、そこで私はCPを一か月しました。誰でもすぐ巡査になれたですね。でも、服部という二世が非常に悪い奴でした。威張りちらしてみんなをこきつかうし、またイモ掘りに越境してつかまった女の人たちを、夜はつきつきと彼が手ごめにして弄んでいました。私はこんな所では働けないと思い、一応家族は古知屋に置いて、一人でも石川に生活の安定を求めて逃げました。

中に入っていた手榴弾はアメリカが茅の中に投げ捨てて、夕方まで私一人だけ原っぱに坐らせられましたよ。私は殺されるかと思っていました。あとで菓子などくれるので、もう殺されたいんだなあと安心してました。夕方になって、沢山の捕虜と一緒にされ、仲村渠（玉城村）につれて行かれました。そこで私はまた呼び出され、調べられたんですが、兵隊だったという大変だと思っ、自分は兵隊ではなかったと頑張ったんです。

何回もしつこく調べるので、それから私ははずつと嘘ばっかりつきました。もう一度風呂敷包みを出して調べられたとき、鉄兜と飯盒は捨てたんだと、私は昭和十八年に南洋から引揚げてきたんだと、女の衣類は昨日まで一緒だった妻が亡くなって残したものだ、実際に自分は呉病院に入院したので兵隊にはとられなかったんだと、妻も看護婦もみんな死んで自分一人になったんだと、言い張ったんです。それで私の嘘が通って、私はアメリカから何か横文字の書かれた札を首からぶら下げられました。そのアイカンは、立派な証明書だったんです。私は外間朝公ですけれど、新城朝公と名乗りましたよ。今もそのアイカンは形見に保管してありますよ。それで、私は山原のお収容所に行つてからも、そのアイカンのお陰でずいぶんと助かりました。

その後、二世やCPから、お前は防衛隊だったんだらうと問い詰められたときも、道でアメリカから訊問されたときも、そのアイカンを見せたらすぐオーケイでしたよ。それで私は、屋比久（佐敷村）の収容所に入つてからも、ずっと新城朝公だと通してきました。

石川で軍作業をしながら家族を呼んで、しばらくしてからコザに移つて、コザに集つた男たちで組合を作ったんです。私は北谷村の漁業組合に加わって、先発隊として自分の部落に入ったわけでした。そのときは、農工隊、建設隊、漁業隊という組合を作つて、それぞれ村の再建にあつたわけです。

上間 カメ (二十七歳) 家事

当時、友軍の将校二人と特攻隊五人が私の家に泊っていました。特攻隊は庭でよく太刀（日本刀）を持って、振りかざしたり突いたりして練習をしていました。その頃、兵隊さんたちは神経質になつていて、私の家の山羊がよく啼くの、邪魔になるといつて嫌っていました。ちょうど三月二十三日にも、山羊がしよちゆう啼くもんだから、うちの三女（連れ子・二十歳）が山羊に食べさせるカンラバーを刈りに出掛けているとき、空襲があつたわけです。それでヨシ子は樹の下に隠れたそうですが、敵に見つかったんでしようね、機銃掃射されて、左足をやられ、そばを通つていた上間の叔父さんがそれを見て、助けて、上間の叔父さんが、ヨシ子はやられたよ、とおんぶしてつれてきていました。

私はヨシ子はもう死んだもんだと思つていました。そして私の家にいた将校が、ちよと家に入らっしゃつたもんだから、謝刈の北谷トンネルの側に、大きな壕があつたんですが、そこには日本軍のお医者さんが何人もいるということで、ヨシ子さんを早くそこへつれて行つて診て貰おうということになって、その少尉さんがそ

こへつれて行って治療して下さいましたよ。二女の姉がついて行きましたけれど、負傷した所に両方からガーゼを入れて薬をつけて包帯したそうです。そして当分は、そこにお医者さんがいる間、ヨシ子はそこにおいた方がいいということになって、三女は預けてあったんですよ。

二十五日には、空襲がはげしくなつて、主人と私は壕に移ったんですけれど、そのとき、北谷の海の近くの山に壕があったので、敵の軍艦が沢山海にきているのが見えるもんだから、そこにももうおれないということになって、私たちはズケランの千六百人以上も入っている大きな壕に行つたんです。その壕は、崖の上と下にあつて、宜野湾や北谷やあっちこちからの避難民が入っていました。

そこは、下の広っぱから綱をかけて登って入る壕で、私たちは綱をたぐつて中に入ったんです。私の母親たちは先にそこにきていました。私は身重でしたから、母親がいるのでほつとして、そこでお産する覚悟はできていました。そこには一週間入っていました。四月五日まで、いたんですけれど、もう非常に苦しくてですね。小便するときなどは、いちいち綱でおりてしなければなりませんでした。

四月二日でしたか、その壕の上を、戦車がどんどん通つて行く音がしていました。そのとき、私の従弟の一中一年生の男の子が、気絶したわけですよ。そこには空気もあまり入らないので、息苦しくなつたんでしようね。真暗闇で、誰れかが、気絶しているよ、と叫んだら、人一人くらい殺してもなんでもないよ、声は出すな、と声も出せませんでした。そして私は、そこで四月五日の午前十一時に、お産したんですよ。おばあさんが手伝つて、手さぐりで、缺と

うとしてしまいましたけれど、アメリカカーが鉄砲を向けて射ろうとしているので、逃げたら今に殺されるよ、と私が言ったもんだから、後から鉄砲を向けているのを見てもう逃げなかつたんです。

私はそれまで三日間ほとんど何も食べないでお産したんですから、母親が持ってきた急須から水を飲んで生き返つたような気持ちでした。それから私たちは、石平までの一里の道を、すぐに歩かされたんですよ。後から鉄砲をつきつけられて、どんどん追われるように歩いて。それから途中で、休憩させられ、トラックがきて、二世がいうことには、怪我人とお産したものは乗りなさい、ということになって、怪我しているヨシ子と私、また二日前にお産した女の人も、もう一人の最近お産した女の人も、たつた四人、そのトラックに乗ったわけです。ところが私たちは海に捨てられると思つて、みんな泣き別れたんですよ。非常に泣いて。実際にトラックは海に向かつていたんです。着いたところは、今のハンビ飛行場のあるところ、北前の浜に、テントが張つてあつて、中には民家から持ってきた畳も敷いてありました。そこには外人の医者が出て、二世が通訳して赤ちゃんを診てくれたんです。赤ちゃんの膺は、暗闇の中でしたもんだから緩くしか縫つてなかつたので、腫れあがつていました。外人の医者は糸をはずして強く縫つて、薬をつけて、包帯を巻いてくれました。歩いてきた一般の人たちは外にいて、私たちはテントの中に入れられ、食事は玄米の握り飯一コでした。オシメは田んぼで洗っていました。私の母親が。

ハンビ飛行場(北前)に一週聞いてから、みんな一緒にトラックで野嵩に運ばれました。出発するとき、浜ではただアメリカカーが沢

糸は準備して持っていましたから、膺を切つて結んで、そしてイヤー(後産)をおろすときにアメリカカーに見つかつてしまつたんです。

アメリカカー四名に二世一人が壕の側にきて、下から二世が、ひもじい思いもさせないよ、殺しもしないから出てきなさい、と方言をまじえて喋りながらあがつてきました。外人が入つてきたもんだから、おばあさんは汚れた手はそのままで、とうとう大変になつた、わたしは自分の家族のところへ行こうね、と言つて行つてしまひ、二十歳になる怪我した三女はその姉がおんぶして行つてしまひ、お産したばかりの私と主人は二人きりになって、出て行くほかはないと諦めました。主人は生れたばかりの赤ちゃんを蒲団でからんでおんぶして、私はどこで殺されるかもしれないからと思つて上等の着物を出して着替えて、母親が冷えないようにと出してあつた足袋と下駄を履くひまもなく、下着はただパンツ一つでしたけれど、側にいる女の子は今日かぎりで死ぬんだねとわアわア泣くもんだから、私はびっくりして、出血して血が全部流れてしもうてなくなつたよ、そのままだつて、荷物を頭の上で、すぐ綱をつかんでおりたんです。荷物は、赤ちゃんの着替えやおシメ、煙節、イモクズ、砂糖など入れた風呂敷包みでした。

下に来たら、上間の叔父さんはお産したことに気付いてないもんだから、私の主人に、蒲団を背負っているのか、と言つていました。赤ちゃんをおんぶしてたんですけれど、それから私たちは、壕の入口に並べさせられたもんだから、そして戦車が沢山あるのを見て、それで驟き殺すんだなあと思ひましたよ。男の人たちは逃げよ

山いるのが見えるだけで、戦争という感じもなく、何事もなかつたんです。野嵩に行つたら、弾がどんどんとんでくるんです。みんな壕の中に入つて、二週間ばかりそこにいました。砲弾があんまり激しくて、民家に隠れている人たちは、弾にあたつて、それは友軍の弾だったかもしれせんけれど、死んだものも、大怪我したのもありました。

野嵩には、外人も入りくんでいますよね。だから英語ができるものは残れという命令が出ていました。みんなはコザ・安慶田あけりだに移動するの、残つたら大変だと思ひ、私の主人はハワイ帰りで言葉が少し通じていましたから、これは大変だ残つたら飢え死にすと思つて、こつそり知らんふりして私と主人は荷物をさきにトラックに乗せてからみんなの中にまぎれこんで乗つたんです。

コザの安慶田に移動してからは、何事もなく、約二年間ずつとそこにいました。最初はアメリカの配給がなかったので、私たちはあつちこつちの畑や山から、イモなどいつも食糧探しをしていました。その頃は、私がお産したばかりだし、三女は怪我しているし、手が足りなくて、人一倍苦労しました。

知念 トミ (三十七歳)

私はその頃、次男坊を妊娠していたもんですから、五月に生れる予定だったので、すすめられていた山原への疎開にも行かなかつたわけですよ。

¹上ヒージャーの、泉の側の壕に、私たちは入っていました。四月

四日でしたか、アメリカさんがきて、私たちを捕虜にして、砂辺の浜につれて行きました。

四月一日にアメリカさんが上陸しているのを、私は妊娠していたので壕にとじこもったきりで見ませんでしたけど、子供たちが山の上にあがって見てきたと言っておこられてもきかん、子供たちはときどき這って見てくるようでした。そして壕の中でも、上陸しているよ、上陸しているよ、とみんな話していました。壕の中には五十名あまり入っていました。あのときは艦砲射撃もはげしいね。壕の上から弾がビュウときたら、松林の松が、パチンパチンと折れる音が壕の中に坐っていて聞こえるし、樹が倒れるのも見られよったんですよ。でもアメリカさんがくるまでは、隣組の非常米やら班長が壕の中に運んで、大きなシンメー鍋にたいいて、水もすぐ近くの泉から空襲のないときに汲んできて、みんなに配給していましたから、ひもじい思いはしませんでした。

そしてアメリカさんは、昼、壕から小父さんが小便しに外に出て、歩いているときアメリカさんに見られたんですよ、小父さんは「アツシエ、アメリカカーが、ウマカラ、歩ツチュン、ヒヤー」とびつくりして帰ってきて間もなくして、壕を見つけてきたんですよ。アメリカさんは鉄砲を持って壕の前におりてきたわけですよ。

「カモワン、カモワン、デテコイ、デテコイ」と二世がいうたから、お婆さんが「カマーヨー」と呼んでいると言っていました。「カマーはいないが、どうしてカマーと呼ぶのかね」と。小父さんは「わしが小便するときアメリカカーに見られてしまったよ、お婆さん」と答えていました。

んですよ。シードのおばあさんが産婆代りに手伝ってくれました。その誕生日はだいたい見当で、五月二十日ということにしました。ちようどその日に、アメリカのビルマ米が配給されて、みんなこの子はケープ（徳がある）だねというて、百十七名の分を、大きなシンメー鍋にご飯を焚いて、そしてお祝いのつもりでみんな食べたんですよ。

その頃、夜は八時からどこにも出られませんでした。ところが、私の父の姉にあたるおばあさんが、朝のまだ暗いうちに便所に行つて、下の家の便所に行くつもりで、下の屋敷の角でアメリカさんにすぐ殺られてしもうて。アイエナー（感嘆詞）おばあよ、便所入りにいま出て行つたけど、ああ殺られてしまったじやないの。朝は、九時十時からしか、作業といつてアメリカさんにつれて行つて貰つて食糧がしに出掛けていませんでしたから。それまでは警戒がきびしかったです。

島袋には二か月いてから、みんなトラックで宜野座村の福山に移動したんです。福山には四万八千名ほどの避難民が集まつておったんですよ。そこに私たちは一年ばかりいました。食糧難で、配給される豆などの缶詰ではとても足りないの、草の葉や、海の藻や、山にあるサンチラヌ葉（サツマサンキライ）やチファア（ツハブキ）等を食べておつたんです。家といつても、簡単な小屋で、木や茅で作つてあつたんですけど、雨が降るとずぶ濡れになるような掘つ建て小屋でした。

すると余所のお父さんが急に決心して、もうどうにもならない、さあさあ年寄り子供から出なさい、何も持たずに出なさい、何か持ったら大変だから、そのまま出なさい、とみんなにすすめたんですよ。

みんなが壕の外に出たら、一人ひとり上着を脱いだり着物を脱いだりして、アメリカさんが身体検査をして。そのとき私の貯金通帳をアメリカさんが取ってしまいました。やがて捕虜になった人たちは、古い大きな家の庭から畑まで一ぱいになって、二百名ぐらいいなっていました。また戦車は、表から大豆から畑の作物を踏みじつて、一ぱい並んでいましたよ。そして山の下の裾まで、アメリカさんたちが一ぱい立っていました。アメリカさんは、私たちを休ませて、煙草をふかしてみせてから、欲しい人たちに配っていました。また通訳は、私たちに向かつて、殺さないから安心しなさい、食事もあたえるから、と説明していました。

それから捕虜になったそれだけの人たちは、トラックで砂辺の浜につれて行かれました。その日は四月五日だったと思います。砂辺の浜には三日いました。そこでは男の人たちが食糧を近くの壕から探し集めてきて、みんなで焚いて、おにぎりを作つてみんなに配給して、どうやら飢えをしのいでいました。

四日目は、年寄りと子供と病人はみんなトラックに乗せられ、比嘉・島袋につれて行かれました。島袋には大きな家があるまま沢山残っていましたから、私たち百名あまりは民家に分散して入れられたんですよ。

私は島袋の民家の床の前で、五十名もいる中で次男坊をお産した

崎浜 トシ（十八歳） 農業

私は当時未婚で、父が関節炎をわずらっていましたから、父代りに農業をしていました。

三月二十五日に、もうここは危険だから避難しなさいと、友軍の兵隊から言われてすね。その晩、私は米と味噌と食糧など持てるだけ持つて、兄と兄嫁と一緒に、着られるだけ服も重ねて着て、歩いて金武まで行つて、夜が明けて敵の飛行機がきたもんだから、すぐ近くの山の中に隠れたんですよ。そして昼の間中、木蔭に隠れてすね。

羽地には、すでに父と母と体の弱い姉と小さい弟たちが、先に疎開してましたから、私たちも金武から羽地向かったんですよ。その二十六日は夜通し雨でした。私たちは濡れて、羽地の振慶名に明け方についたんですよ。むこうでは両親たちが壕を掘りかけていましたから、そこに家族揃つて一日入つて、夜は壕掘りして、みんなが楽に入れるような壕を作つて一週間入っていました。また夜は、兄と一緒に叔父さんは、遠い所まで食糧探しに出かけました。そして叔父さんは、三度目に、食糧を取りに田井等の方まで行つて、アメリカカーにつかまされたということで、帰つてきませんでした。そのときの兄の話で、米軍がすでに上陸していることを知りました。

私たちは山の避難小屋の近くの壕に移っていました。そこへアメリカカーがべらべら英語で喋りながらきたんですよ。それで、みんなばらばらに逃げたんですよ。兄は逃げるときに、アメリカカーに射ら

れたんですけど、肩をかすくらいの傷だったんです。兵隊帰りでしたから、戦争の要領を心得ていたんでしょね、下の方には行かないで、山の上の方に逃げて、命は助かったんです。私はそのすきに避難小屋の後方から逃げて難をのがれたんです。年寄りと子供たちは避難小屋に残っていたんですけど、アメリカは来て見て、何もせず、煙草をすってみせてから与えたりマッチやガムやチョコレート等も置いて行ったそうです。

夜になって、私たちのいる山の中に、アメリカはもういないから帰ってこいよ、と叫びながら探しにきていたんです。私はまだその近くにアメリカが隠れているかもしれないと思って、夜中になつてから帰ったんです。

それからみんな一緒になった翌日、もうそこは危険だからと思ひ、川上の山の中に避難して、またそこで壕を掘って、その壕に二週間ばかりいました。

そこにもアメリカが近づいてきたので、少しでも自分のシマ(部落)に近い方がいいということになって、山道を方向もわからずただ歩いて、久志村の辺野古に行つたんです。その途中で、大浦あたりで、先に歩いてた兄と従兄の二人はアメリカにつかまっってしまったんです。まわり道して辺野古には、夕方ついたんです、アメリカたちは、わいわい喋りながら道端に休憩していて、またレコードをかけて遊んでいましたよ。このアメリカたちは、私たちを見ても何もしませんでした。近づいて行くと、アメリカたちは半分日本語で手真似をしてですね、今晚はここに休んで明日は金武の方に行きなさい、と言っていました。私たちが言われる通

もなきそりに俯いているのを見て、自分たちもそんなふうになると思っていました。

その頃、私が仲宗根にイモが沢山あるという噂をきいてイモを買に行つた帰り、私はアメリカの山狩りにあつて捕虜になつてしまったんです。山道で、すぐ待ちなさいと後から止められ、トラックに乗せられ、羽地につれて行かれたんです。私は二世に両親や子供たちを久志の部落においてきたから助けてくださいとお願いしたら、後で家族はCPがつれてきてありました。捕虜になつてからは、私たちがまた振麿名の民家の馬小屋に入つて暮らしました。そこから軍作業に二日行つたんですけど、黒んぼが石鹼やら何やらくれるもんだから、こわくなつてですね、私は若かったもんだから身の危険を感じてもう行かなかつたんです。それから、田井等のカンパンの炊事婦に出たんです。その頃は、よく強姦事件がありました。

イモ掘り作業といつて、各家庭から集つた人たちを、MPがつれて畑に行きよつたんです。でも、あの谷間にもこの谷間にもイモのあるところに、みんな散らばつて行くもんだから、MPには目が届かないんですよ。だから若い女は、いつの間にかすくアメリカにだっこされてつれて行かれてしまふんです。私はこわくて、ほとんど行きませんでした。母の話では、ある人妻がつれて行かれ、着物も引きちぎられて裸の状態になつて夕方帰つてきたそうです。

私たちは、それから田井等のカンパンに何か月かいて、津波古という二世におねがいして、石川に移りました。石川で父とも違い家族みんな揃つたわけでした。

り、辺野古の民家に泊つているとき、夜中に、山から友軍の兵隊たちが食糧探しに下りてきたんです。そして兵隊たちは、あんたがたはどうしたの、と訊くもんだから、こういう事情で自分の部落に帰る途中アメリカに停められて泊つているんです、と説明したら、大変だよ、アメリカは若い女は名護に集めてみんなジュリ(娼婦)にするんだよ、みんな弄んで使えなくなつたら殺して捨てるんだから大変だよ、山の中に逃げた方がいいよ、と言っていました。

翌日、私たちはそうかもしれないと思って、また久志岳にのぼつたんです。道がわからないもんだから、村の人に道案内をお金をあげて頼んで。そして久志岳に約一か月もおりました。

山の中では、持っていた米で、少しづつ、おかゆを作って食べていましたけれど、それもなくなった頃、父はこのまま死んでも弾にあつて死んでも同じだから、食糧を探してこようね、と言つて、私たちは止めたんですけど、出て行つたんです。父はそれっきり帰つてきませんでした。父は途中で捕虜になつていて、ずっと後になつて私たちと石川の収容所で逢つたんですけど。それから私たちは、骨と皮だけになつて、久志の部落に下りて行つて、畑から芽芋やキヤベツの取つた後の根元などを、夜間に探してきて、また潮水を海から汲んできてそれを煮つめて塩を作つて、食糧にしてみました。また木で小屋を作つて芽を敷いて寝ていました。みんな栄養失調になつていましたけど、二見にウス(潮水)を汲みに行くときに、民家の壁に、半分骨が出たミイラになつた死体や、福木の根っこにもたれて坐っている子供が、今にも死にそうになつて、視力

島袋 弘 (三十三歳) 防衛隊

私は二月十五日に防衛隊に召集されて、今の嘉手納飛行場にすな、むこうの防衛隊として仕事をしておつたですよ。その仕事のやりようはですな、敵の爆撃でやられた滑走路をですな、私は班長をしていたもんですから、七十名くらいをつれて、その穴埋め作業をやつておつたですよ。

それから上陸二、三日前にですな、友軍がコザのウクラの山の中に沢山の食糧や薬品を隠してあつたんですが、私は隊長から命令を受けて、君は部下を七名つれてむこうにいる兵隊と交替してきなさい、と言われて、私たちはむこうに行つてその番をしたんですよ。

三日ぐらい経つて、ちょうどウクラの出身の浜平という人がいて、その人は後で死にましたが、その(へん)の地形に詳しく、この近くに昔の大きなウカエ墓があるから、というもんだから、その墓を避難場所にするつもりで、私たちはその墓の中からジイシガミ(厨子がめ)を出して、私たちは食糧も欲しいだけ食べて墓の中に二晩入っていました。二日目の晩に、波平と比嘉に竹槍を作るから竹を切つてきなさい、と私は命令したんです。銃は私一人しか持つてなかつたんですよ。二人は日が暮れてから、沖繩のマータクですな、あれを切りに出掛けたんですよ。その二人は途中でですな、友軍が追われて囂頭に逃げるのと会つたわけですよ。そして引返してきて、私にそういうもんだから、島袋さんすぐ近くまでもうアメリカが来ているから逃げよう、そうかじゃ逃げようということに

なって、私たちは食糧を持てるだけ持ってますな、煙節やら米やら薬品など自分の好きなものから靴下に入れて、幾つもくくって持って、国頭に逃げたんですよ。

そしたら、羽地の川上で、私たちはまた友軍と一緒にあったんですよ。あのおきの中隊長は、米須という人で、それから私たちも一緒にあって、米須中尉の命令に従って、国頭の険しい山の中をぐるぐる廻ったわけですよ。持っている食糧を食べながら、川づたいに、ずっと山奥を歩いて。

国頭の与那覇岳の麓に約一か月おったですよ。米須中尉が、とうとう音をあげて、もうこうしていても仕方がないから、長浜伍長、勝連少尉、米須中尉と私の四名は、本部として最後まで一緒に行動することに決めて、ほかの人たちは全部解散、思い思いにしなさい、と言ったんですよ。

それから私たち四名は、山を下って、東海岸の安波という部落を探して行っただですよ。安波に行くまでに、二日間ひもじい思いをして、山イチゴを食べただけでした。安波の部落の人たちは、山の中に避難小屋を作ってみんなそこへ昼間は逃げ隠れて、誰もおらんのですよ。だから私たちは、空家になったあつちこつちの家を探して、いろんな食べ物を食べたんですよ。部落の人たちは、夜になると山から下りてくるもんだから、気付かれないように私たちは空家に隠れていました。

星は部落の人たちは誰もおらんのですよ。空襲もないし、アメリカ兵も一人も見あたらん。だから私たちはそこにのんびり三か月間おったんですよ。しかしだんだん食糧に困るようになって、その三

にして、その日に、読谷村の人たちも混って四十名ぐらいと一緒に、山道を歩いてですな、横断するのに五里ぐらいあるそうですよ、辺土名の方に向かったわけですよ。山の中で日が暮れて、みんな一晩は山の中で寝ました。私は読谷出身の子供二人をかかえた女の人の、夫ということにして、その女の人の荷物を担いだりしました。夜が明けて出発して、夫婦といった形で一緒に歩いて、午前中には上辺土名という部落についたんですよ。

その上辺土名近くには、そうとうのアメリカ兵がいました。私たちは公民館みたいなムラヤーに休んだんですよ。そこへアメリカ兵たちがきて、ムラヤーの中にしまつてあった村芝居のカツラや衣裳などを出して、珍しそうにいじっていたんですよ。それから、私たちのうちに読谷村出身の若い姉妹の娘をつれたお母さんがいましたが、急にアメリカ兵がきて、その若い娘をつれて行くこうとするんですよ。すると、その十八、九になる娘たちは泣いてお母さんにすがりついていましたが、無理矢理につれて行くもんだから、娘たちは方言ですな、お母さん私たちを産んだと思わないで下さい、忘れて下さい、と言っていました。私は助けようと思って、追って四、五間ぐらい行って行っただんですが、鉄砲を向けられて、びっくりして逃げてきました。アメリカ兵たちは娘たちを藪の中につれて行ってしまいました。娘たちの母親は、非常に泣いていました。それから四十分ぐらいしてから、娘たちは着物なども汚れたままで泣いた顔で帰って来ていました。

その後、避難民のうちから、約二十名ぐらいの男の人たちは、アメリカ軍の命令で、トラックに乗せられて、羽地の田井等のカンパ

か月の間に、私たちは何度も食糧探しに出かけました。

次には、壕を作るのに必要な松の材木が、おそらく友軍が伐採して中頭あたりに舟で運ぶつもりで置いてあったんでしよう、その沢山の松が枯れてですな、あったんですよ。それは火を焚くのにはよほどよかったもんだから、私たちは浜に転っている飛行機の燃料タンクを利用して、潮水の中に入れてどんどん松を燃やして、塩を作ってますな、それを担いで、山を横断して、西海岸の辺土名の部落の上の避難小屋まで持って行って、米などと交換してしま

た。そうこうしているうちに、ある日、私たちがやはり塩を作っているときです。海の方から、海上トラックが来るんですよ、二隻。その二隻は、私たち四名が塩を作っているすぐ側にくっつけてきたんですよ。見たらアメリカ兵でしたが、私たちは逃げもしなかったです。そんな暇もなく、そのままどんどん火を燃やしていました。私たちは村民のようにもう着物姿でした。また素足で、誰が見ても兵隊には見えなかったでしょう。海上トラックから、アメリカ人が七名、二世が二名、捕虜になった後米軍の手伝いをしているらしい沖縄青年が四名、おりてきたんですよ。そして二世がいうには、この部落は十日間かかって全部消毒するから、部落民は一たんカータテーラ(東村の川田・平良)という所に移動しなさい、歩けない人はあさつての木曜日につれにくるからその準備をしておきなさい、ということでした。

海上トラックがいなくなった後、部落民がぞくぞく現われて、また中部からの避難民も集ってきました。私は他の三名と別れることになった。驚くほど沢山の人がおるんですよ。テントが百近くもあって、それぞれ班長がいて、命令的に仕事をしていました。そこには教員した人も役所にいた人もおるし、知った顔の人が何人もおるんですよ。そして私が事務所の受付に行ったら、あなたは何番のキャンパンに行きなさい、と言われて、テントには番号がついていたんですよ、二、三名ずつやらされたわけですよ。その翌日からはすぐ仕事でした。仕事は、名護湾の沖に弾薬を捨てる仕事でした。

それから一か月ぐらいたら、六十歳以上の人たちは、事務所に集まるように言われて、あのおとき私は婦がほうほうはえていて誰が見ても年寄りに見えていましたから、私はまっさきに行っただんですよ。すると係員は、あなたは妻子のいる所を知っているかと訊かれたんですよ。私はキャンパンにいる頃に北谷村の人たちは福山か惣慶か漢那あたりにいるということを聞いていましたから、そう言ったら、じゃあつれて行くこうということになったんですよ。

それで私たちは二人のCPにつれられて、荷物を担いで、歩いて久志ぐわまで来たんですよ。久志ぐわにきたら、日が暮れたもんだから、そこで十名ぐらいい一緒に民家に泊ったんですよ。その夜、砂辺の人に逢ったもんだから、家族のことを訊いてみたら、宜野座にいるらしいことが判ったんですよ。で、その翌日、CPに頼んで、宜野座につれて行って貰ったんですよ。宜野座に行ったら、私の妻の弟が、その収容所の受付におるんですよ。だからすぐその足で、義弟が家族のいるところへつれて行ってくれたんですよ。それから家族と一緒にあって、そこで長い間、暮らしたんですよ。

いつ頃だったか、あのとき、宮野座の本部に米軍の炊事があって、その皿洗いなどは十五、六歳の子供たちの仕事になっていました。しかしやがて、学校がはじまって、皿洗いや掃除の仕事は、子供たちと年寄りとが交替になったわけです。学校は小さいテント小屋でした。私はそのとき炊事の仕事をはじめて、それからずっと約八か月そこにいたんです。

その後、北谷村にはなかなか入れなかったもんだから、私は家内の実家の家族も一緒に、北中城村の喜舎場というところにすな、むこうにみんなを引きつれて移動したですよ。喜舎場では、私は農耕しながら、米軍の中央倉庫という食糧の集積所がズケランにあったので、そこへ通って人夫として働いたんです。

北谷には、四十九年に移動しました。あのときは謝刈ではなく、上の桃園に、私たちは入りました。すでに一部は移動していましたが、村役所もありましたが、小さいトタン家でした。住民の家は、規格家で、二間に二間半の大きさで、茅葺きでした。それを二つに区切って、二世帯ずつ入ったわけです。

北谷村(村役所) 星 雅彦

時 一九七〇年七月二十二日
場所 北谷村役所 宿直室

氏名	現住所
喜友名朝昭	
伊礼政子	
山川元清	

解説

ここには偶然にも三人のティーンエイジャーだったときの体験が収録されている。喜友名朝昭氏は十六歳、伊礼政子さんは十八歳、山川元清氏は十一歳で、三者とも米軍上陸地点からそう遠くない所で十日以内に捕虜になった短い体験記録であるが、そして三者は現在立派な中年で、中年の言葉で語られているが、内容は少年の透明な目で目撃したものばかりである。

喜友名氏と山川氏の話には、純心で勇敢な少年であったことが鮮明に出ているが、それぞれの話の糸口となっている昭和十九年の十月十日の空襲について、見解のくいちがいが見られる。このことはここでは大して重要な意味をもたないことであるものの、十・十空襲のとき、喜友名氏は読谷飛行場から爆撃されたと言い、山川氏は

那覇からその第一撃が投下されたと言っている点、それは受取り方がいかに他に、時間的なことへの記憶の摩滅やずれがはっきり出ている例であろう。

筆者の調べでは、米機動部隊(艦載機)の来襲は、午前六時四十分頃であり、中部(北・中飛行場)地区と那覇地区の二手に別れてほとんど同時に空襲した模様である。そしてそれは第一次と第二次とがあり、第一次も第一波から四波に渡って行なわれている。

ところで、ここで最も注目すべきことは、昭和二十年四月一日に、米軍が上陸したことについて、(山川氏そのときの米軍の様子を見た話は詳細である。)住民の一部は目撃していたばかりでなく、上陸より三日前頃、三月二十九日か三十日か三十一日に、米軍の少数が斥候隊としてすでに北谷に上陸していたことをも、住民はよく見ていたということである。

註、『鉄の暴風』に次のように記されているのは、明かに訂正されるべきことであろう。「四月一日——米軍はついに上陸した。壕内に蟠居していた住民が、米軍の上陸を知ったのは、三日後のことであった。(中略)多くの村民は、翌二日に至っても、米軍上陸の事実を知らなかった」。

吉原を取材したときも右の件は出てきていたが、喜友名氏は四月二日早朝に捕虜になっていて、砂辺の砂地に簡単に鉄条網(バラ線)を張り回らした収容所に入れられている。そのときすでに荒寥とした砂地の中に二人の捕虜がいた。その日、喜友名氏は米軍に再三呼び出されて日本軍のことについて質問責めにあっている。そして質問から解放されて、もとの砂辺の収容所に戻ったとき、捕虜は